

「田舎はゆくりとした時間が流れている」。そんな表現もあるように、異なる場所には異なる時間が存在する。都市の時間が速いと感ずるのは、やり取りする人間の数が多いからだ。次から次へ対応すべき事態が飛び込んで来て、「いま」はあつひつ間に過ぎ去る。人間がまはら田舎では、それほど頻繁にニュースがあるわけではない。「いま」はある程度持続し、ゆくりと過ぎ去っていく。



開発したのである。実験したごのない時間感覚の中で後、大戦は、それまでの世界が経への連綿の期限はわずかに五時間一八時間後、イギリスからドイツへの最後の連綿の回答期限は「化史」。その後ドイツからあると答えた(カーン)空間の文話のある時代」なのだから十分ア大使は「鉄道あり、電報、電いつセルビアに対し、オーストリアはセルビアに最後通牒をり取りが行われるようになる」と突きつけた。回答時間は四八時間。あまりに短時間で協議できないとだ。だが離れた場所がネットワーである。そのことを示すエピソードから始めよう。

## 京大 人文研

共同研究班が読み解く

## 世界史

瀬戸口 明久

科学史

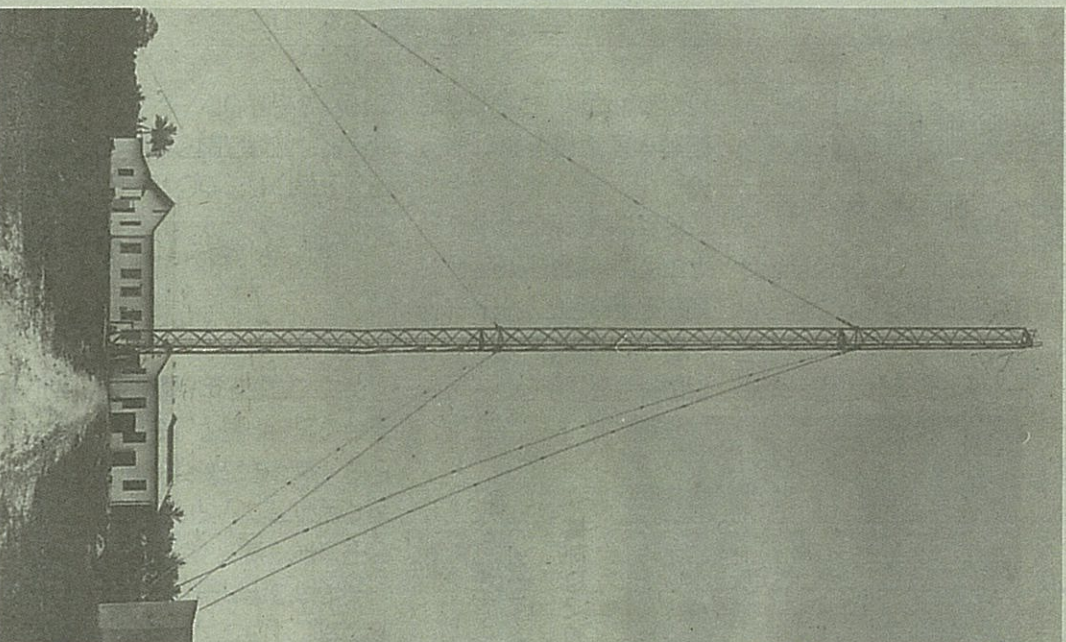


せとくち・あきひさ 1975年  
宮崎県生まれ。京都人文科学研究所准教授。著書に『害虫の誕生』中からみた日本史『日本の動物轉入と動物の関係史』(共著)など。

# 第1次大戦から100年

6

世界は一つの巨大な都市のように振る舞いはじめる。それを可能にしたのが、電信と無線通信である。電信は、電線を通じて離れた場所を結び、情報を伝送する。無線通信は、電波を通じて情報を伝送する。このように、電信と無線通信は、世界を一つに繋げた。開戦とともに、参戦各国は無線通信を戦場に配備していく。これは空間に向けて電磁場の振動を送り出す技術—電波である。世界の時間は一つになったのである。とはいえ、ものすごい速さで流れて受信機さえあれば、どこに



アメリカの旧ドイツ領トーゴランドに設けられた無線通信基地。第一次世界大戦が勃発した1914年前後の撮影か

# 電信と電波 世界は一つに

## 時間・空間共有 逃れるすべなく

これまで第一次世界大戦は、一般に化学の戦争として記憶されてきた。初めて美戦に毒ガスが投入され、空間が化学的に改造されたからである。だが大戦期を通じて、世界の空間が物理的にも変容したことに思いを馳せてみよう。無数の地点から放たれた電波は、光の速度で世界を駆け巡る。そして地球上のあらゆる空間は、幅撃する電波の振動で満たされる。その中で人びとは、目まぐるしく消え去ってゆく「いま」を生きていたのである。



これも遠隔地とやり取りすることができる。塹壕の底、上空を飛行する空機、海上の戦艦、さらには海面向この植民地。刻々と変化する戦局は電波を通じて共有される。そこでは一体化した時間が降り注ぎ、空間が一体化して共有される。それは空間が物理的にも変容したからである。開戦とともに、参戦各国は無線通信を戦場に配備していく。こ

- 1837 モーリス、電信の発明
- 1888 ヘルツ、電磁波の発生に成功
- 1901 マリコーニ、大西洋横断無線通信に成功
- 1902 大英帝国領を結ぶ地球を一周するケーブル網が完成
- 1914 第一次世界大戦勃発
- 1920 アメリカでラジオ放送が始まる

より一体化した時間  
ラジオにテレビ、GPSに無線LAN。現代の世界は、100年前よりのかに稠密(ちゆうみつ)な電波で満たされている。携帯電話の登場によって、私たちはどこにいても

一体化した時間に組み込まれることになった。そこではともすると、電子メールにLINE、フェイスブックと追いついて追いつけないという意外なのは、これだけ無線が普及してもケーブルの重要性は何ら変わっていないことだ。携帯の電波が飛ぶのは基地局まで。そこから先は有線ケーブルでつながっている。大陸間通信でも、大容量の情報をやり取りするために海底ケーブルが不可欠だ。地球はケーブルの網で縛り上げられ、電波の分厚い層に包み込まれているのである。

